

Rare sheep



manx loghtan

NO. 5

目 次

マンクス・ロフトンの繁殖計画 (2)	正田 陽一.....	1
マンクス・ロフトンのウール (2)	百瀬 正香.....	2
ウールは語る.....	浜戸 祥平.....	3
羊と共に生きる.....	山城 一郎.....	4
マン島のワークショップに参加して.....	百瀬 正香.....	5
オリジナルなマンクスが示唆するもの.....	豊岡 均.....	6
スライド・ビデオの会に参加して.....	島田 和子.....	7
制作部門からのお知らせ.....	下山里香子.....	7
自 己 紹 介.....		8
誌上ギャラリー.....	森賀 順子.....	9
マンクス フリース販売のお知らせ.....		9
家畜羊の祖先を探る (中)	正田 陽一.....	10
羊のティータイム.....	百瀬 正香.....	13
私からの提案	百瀬 正香.....	14
研究会オリジナル商品の紹介・インフォメーション・編集後記.....		15



表紙イラスト●笠原徹郎 本文イラスト●大倉真実
 編集協力●小国 徹 工藤聖美 佐藤しおり 品川悠紀 堀内眞里

マックス・ロフタンの繁殖計画 (2)

正田 陽一

二番目の問題点は基礎個体 (founder) の血縁占有度 (representation) の平均化です。聖書の中に出てくる「ノアの箱舟」に積まれた動物は、それぞれの動物種について雌雄1頭ずつ (1つがい) ではなく、3つがいずつだったということです。遺伝学者の U. S. シール博士は「この事実は生物学的にたいへん深い意味を持っている。ファウンダーの持つ遺伝的多様性がそれだけ豊かであったことが、その後の種 (集団) の繁栄に力となっているのだ。」と述べています。

わが国に導入されたマックスは、雄5・雌15の計20頭です。箱舟に乗せられた6頭に較べれば3倍以上のファウンダーの数 (遺伝的多様性の大きさ) と考えてよいのでしょうか? 「否」です。

前号にも指摘したように、この20頭のファウンダーはそれぞれ血縁関係を有しており、かなりの部分の共通遺伝子を保持している可能性があります。ことに母と娘のペアが2組含まれていますから、この親子は遺伝子を50%共有しているわけで、それだけ遺伝的多様性は小さくなっていると考えられます。

この血縁関係の問題のほかにもう一つ、性比の問題があります。箱舟の動物たちが雌雄同数であったのに対し、マックスは雄の数が少なくなっています。雄が雌の1/3の数ということは、言い換えれば、次の世代に対しての影響力が、雄個体は雌個体の3倍ということになります。この場合、見掛け上は20頭の集団であっても、後の世代の多様性の喪失——近交係数の上昇への影響は、もっと小さい集団と等しい効果を持つことになります。これを「集団の有効な大きさ」といい、次の式で計算されます。

$$N_e \text{ (集団の有効な大きさ)} = \frac{4 \times M \times F}{M \text{ (雄の数)} + F \text{ (雌の数)}}$$

雄=5、雌=15を当てはめると $N_e = 1.5$ となります。つまりマックスのファウンダーは雄7.5、雌7.5の集団で無作為交配が行われるのと同じスピードで近親交配が進むことになるわけです。

そこで、このような場合に遺伝的多様性をなるべく後代に豊かに残すためには、基礎個体の血縁占有度 (遺伝的寄与率という言葉も使われます) をなるべく等しくすることが必要です。ファウンダー X の血縁占有度 (R_x) は次の式で求められます。

$$R_x \text{ (}\%) = \frac{\text{集団内の各個体に伝えられている X の遺伝子の比率 (\%) の合計}}{100 \times \text{集団の個体数}}$$

(注: X の遺伝子は子孫には50%、孫には25%伝わっている。ただし、親子交配が行われた時には75%となる。)

後代の集団に対し、数少ないファウンダーのそれぞれの個体が平等に遺伝的な貢献をする。このことがファウンダーの持っている遺伝的多様性を永く子孫に伝えるために大切なことなのです。ある特定の個体だけが特別にたくさんの子孫を作るということは、その特定個体の遺伝子が偏った比率で伝わることになり、望ましいことではありません。これが、第三の問題点である「望ましくない型質」を持つ個体の淘汰ということに関わってきます。

マンクス・ロフトンのウール (2)

百瀬 正香

今回はマンクス・ロフトン・ウールのサンプルをいくつかお届けしたいと思います。

・生産年 : 1993年

・生産国 : 日本

・羊の生年月日 : 1992年

(バージンウール)

カラー : ロフトンカラー (ロフトンはマン語で「光り輝」くとか「茶色の」という意味があり、英語ではムーリットといわれている色です。このサンプルの色は代表的なロフトンカラーです)

- ・特記 : ステープルの真ん中あたりと、根元から1cmぐらいの所がいくらかテンダーになっています。真ん中のテンダーは放牧から舎飼への変化時のトラブル?あるいは管理上のトラブル?とにかく飼育上に何か起こったようです。根元のテンダーは原種の羊特有の換毛現象 (shedding) だと思います。今年この羊の毛刈りは少し遅く6月に入ってからでした。タイミングとして4月末頃が良いのかと思われます。恐らくこの1cm程のウールは糸作りの時ネップとして出てくるかも知れません。

・生産年 : 1993年

・生産国 : 日本

・羊の生年月日 : 1989年

カラー : ベージュからグレー (一頭の羊の中でマーブルに変化しており、更に一つのステープルの中でも変化しています)

- ・特記 : マンクス・ロフトンはロフトン・カラーでなくてはいけない、というスタンダードからいうとこの色はかなり問題があります。これは今年だけの現象ではなく毎年この羊はこの様なマーブルカラーなのです。どうしてこのような現象が起こるのか不思議なことです。スピナーにとっては魅力あることです。このステープルも毛刈りを6月にしたという「遅い毛刈り」の問題点が現れています。根元の濃色の部分は次の年のウールであることが分かります)

・生産年 : 1990年

・生産国 : 英国

・羊の生年月日 : 不明

・カラー : ロフトンカラー (かなり明るい色ですがロフトンカラーの範疇に入ります)

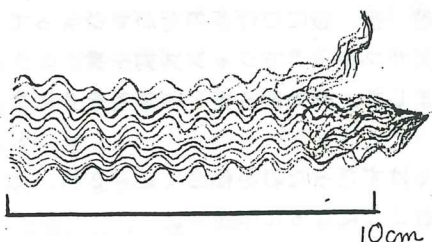
- ・特記 : 外側にヘアコート、内側にソフトなウールという、原種の特徴の一つ二重構造のウールです。ウールとして利用するには少々難があるため淘汰の対象となっています。日本のマンクス・ロフトンにこのタイプはいません。

浜戸 祥平

毛刈りを終え、すっきりした羊達が放牧地に出て早2ヶ月。全国の羊様お元気でお過しでしょうか。おいしいおいしい青草をお腹いっぱい食べていますか？お仔様達は、みんな元気に順調にお育ちでしょうか？シラミやダニがついてお困りの方はいらっしやいませんか？…なんて羊達に聞いてみたところで返ってくる答えはいつも「メェ〜」。「これじゃYes だかNoだかさっぱりわからねえ！」とおっしゃる皆様。羊達からのお話はなにも「メェ〜」の一言だけではないのです。羊達からの情報はその身体にいつもまとっているカルテにすべてインプットされ、私達人間に訴えかけているのです。そのカルテとは、ずばりウール！刈り取ったフリースをまだお持ちでしたら今一度広げてみて、じっくり観察してみてください。きっといろいろな話を聞かせてくれることと思いますよ。

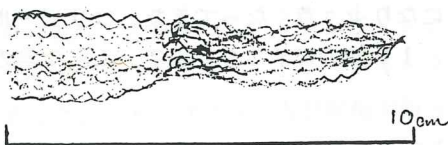
小岩井農場「羊館」では昨年から毛刈りの都度、1頭ごとに1スティプルずつサンプリングし、毛重量、毛番手、毛長等を記録しています。今年で2年目になったのですがそれらのファイルをあらためてよく見てびっくり！病気はもちろんのこと、同じ特徴を持った羊同志は、そのウールまで同じ特徴をもっていたのです。以下にその中からほんの一例を挙げて見ようと思います。

①乳頭が肥大で仔羊が乳を飲むことができなかつた羊のウール



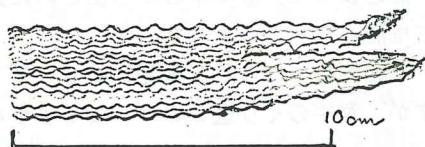
この様な羊が3頭いたのですが、いずれのウールも左の図のようにコリデールにしては太番手で(50S)、密度が粗であり、光沢に乏しい物でした。乳頭肥大が先天的なものか、病気等による後天的なものかは不明ですが、いずれにしろ羊の身体での特徴が毛の特徴として同じ性質を示した良い例であると思います。

②夏が弱く、食い込みが極端に落ちる羊のウール



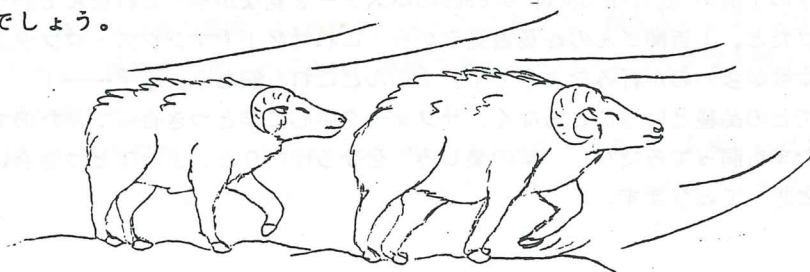
ここに紹介したウールの持ち主は、毎年盛夏期になると決まって行動が鈍くなり、食い込み量も落ち、離乳後増飼をしてもなかなかコンディションが回復しません。その結果毎年分娩はするもののいずれも単仔分娩に終わっています。

③放牧中腐蹄症に悩み、その後回復した羊のウール



この羊は、放牧後間もなく重度の腐蹄症にかかり、栄養状態が一時的に悪化したがその後治療に当たった結果完治し、栄養状態もよくなりました。以上紹介したのはほんの一例ですがこの様にウールからその羊をいろいろな方面から見る

ことができます。健康状態のチェックはもとより、選抜淘汰の基準にするにも良い指標となるでしょう。



羊と共に生きる

山城 一郎

自宅療養中だった羊たちが、やっと放牧地に放たれてゆきました。今春、私のところでは初めて腐蹄症にかかりました。話では聞いていましたが、びっこをひき始めて気がつき全頭調べるとけっこう蹄を痛めている。油断していたなあ。2ヶ月程羊舎でがまんの乾草暮らし。青草の薫りに日々べえべえしてましたが、爪も固まってきたのでやっと放牧。

羊たちの夏の生活の場は、すこし離れた畑のそばにあります。ヨモギ・イタドリ・クローバー等の雑草放牧地で、遅れてきた羊は仲間たちと再会。羊を放牧地に放す時は、こちらもなんだか気持ちがすっきりします。

当“羊が丘牧場”（本日仮命名、北海道といえば羊が丘）のメンバーを紹介しますと…

- ・シーガリ＝古株の12歳。S56の耳環も落ちてない。

品種しれずの白顔。この2年うまく子羊を産んでないがしぶとさと、のらりとした性格で生きている。この性格こそ、私の羊のイメージです。

- ・ヘス＝産まれた当時活躍していたスイスアルペン女子スキヤーの名をいただく。

これまたもう子羊を産まないけど、人間の子供達の人気ゆえに（背中に乗せてくれる）存命中。

- ・マジヨリ＝だいたい羊の名前は子供がつけます。首、腰、腹にこげ茶の毛がマジョっている部分カラード。母チュビオット、父サフォークでジャンプ力一番。

- ・つばき＝昨年、茶路めん羊牧場より引っ越してきました。弾力ある美しい羊毛を身にまとっている。めんこい。

- ・アリタ＝在田（ありた）さんちに羊肉となって行くはずだったのが都合で延期され、そのうち器量の良さで今シーズン子羊を生むことになった幸運羊。

- ・よういち＝つばきと一緒に武藤さんのところより“あと3年”の保証つきでのり込んできた種羊。ノソノソとしか歩かない。しかし、9月の交配期に備えてか、近頃自主トレ中のようだ。早走するようになり少々荒くなってきた。コリデール。

他に子羊もいれ、夏は20頭くらいが草を食み、10頭の親羊たちで越冬。こんな羊の歴がめぐってゆきます。

私のところは畑作が主な仕事です。芋、南瓜、人参、麦、大豆等を手におえる範囲で広げて育てております。羊も堆肥づくりのために飼い始めました。春に羊舎から出された敷ワラは、切り返してゆくと、ひと夏ひと冬を越して堆肥となってゆきます。

今でも畑にまくのはこの羊堆肥と鶏フンだけです。この頭数で作られる堆肥は約6～7トでしょう。畑に広げればバラバラとしたものですが、毎年のくり返しのせいでしょうか野菜もよく収穫できるようになってきました。

小4年の子供がEnglish Sheep Breedsのポスターを見ながら「これなんていうの?」「ヤコブだ。」百瀬さんの絵葉書見ながら「これは?」「マンクス・ロフタン。」どうも角の本数が多いのが好みなようです。「こんどこれも飼おう。」「……」

今までの品種ということもなく、サフォーク中心に羊とつき合ってきたのですが、いろんな羊も飼ってみたり、“羊の楽しみ”をひろげたりと、また羊とつき合い直してゆきたいと思っています。

マン島のワークショップに参加して

百瀬 正香

今年のワークショップはマンクス・ロフトンのオリジナルな地、マン島で開かれました。ここでの開催は初めての事です。今までマン島と英国はお互い親しい交流がなく、わずか2年程前から情報を交換するようになったばかりです。去年トラストの月刊誌「アーク」にマン島のブリーダー達は「英国の人達はマンクス・ロフトンをダウン種にするつもりですか？」とユーモアたっぷりの抗議文を載せました。マンクス・ロフトンはプリミティブ・シープ。荒野でも生息出来る野性種です。脚がすらっと鹿のような容姿をしているべきで、良質の牧草をふんだんに与えられ、肉用ダウン種のように太ってはいけないというのでしょうか。その紙上討論はかなり私たちをエキサイトさせました。そして英国のブリーダー達はオリジンのマンクス・ロフトンを実際見て勉強しようという事になったのです。

まず始めにマン島の南、現在無人島となっているカーフ島にボートで出掛け、半野生のマンクス・ロフトンを観察することから始まりました。次にマン島のマンクス・ロフトンを使ってグレード分けの勉強。その後、各レポーターからの報告。と三日間にわたって、精力的に日程がこなされていきました。

ホワイトマーキングは、このマークが過去に於いてソーエイやキャスルミルク・ムーリットなどの他種との掛け合わせによる影響からではなく、オリジナルであるという確証を得るため現在実験飼育していますが、それを立証することはかなり難しそうです。不可能だろうと言う人達もいます。いっそのことマンクスのパイボルド（斑な）・シープとして更なる希少種としたらと言う人達さえいると笑い話のように話していましたが、笑えない話と聞いた人も多かったのではないのでしょうか。

交雑問題は、最近BBC テレビのある番組でコックのチーフマスターが「羊の肉はマンクス・ロフトンが最高」と言ったとかで、生産量の少ないこの羊に何を掛け合わせたらより生産性が高くなるかと、今まで以上に議論が盛り上がりました。一般的などころではサフォーク、それに続いてテキスエル、シャロライン、ショロブシャーとなるようです。ところが人によってお気に入りがあるらしく、サフォークは問題ないのですが、次となると意見がだいぶ割れました。シャロラインの方が肩幅が張っているテキスエルよりも、小柄なマンクスには交雑に向いていると自分の飼育経験を述べる人もいます。十五才の少年も一人のシェパードとして臆せず自分の意見を述べています。肉のためばかりでなく、ウールに関して特別注意を払って掛け合わせている人達もいました。光沢をだすためにリンカーンやレスター、スエルデュールを掛ける人。レスターは、ある年は白い羊、他の年は黒い羊が生まれるといます。またカラーコリデールを掛けて不思議な色合いをたのしんでいる人達もいます。羊の種類のない私たちにとって涙の出るような話ばかりです。

何といても議論が一番沸いたのは肉生産に関する話しの時でした。これは日本でも同じことですが……特にマン島の農林大臣がマンクス・ロフトンの一飼育者としてこの会に出席していましたから、肉流通に関して「政府の見解を問う」というような質問も飛び出し白熱したものになりました。

いつの日にか日本の飼育者たちも、オリジナルなマンクス・ロフトンを見に行けたらと思います。そして、それらを良く見極めた上で、日本のマンクスはどうあるべきか考えていかななくてはならない時が来たように思いますが、いかがでしょう。

オリジナルなマンクスが示唆するもの

Flying Sheep 豊岡 均

今回の“マンクス・ビデオ”は、今春の羊毛収穫祭にイベント企画案のひとつでした。マンクス導入から三年が経過した今、英国で飼われていた当時のマンクスのビデオを見ながら、各自気付いたことを話し合えば何か違った発見があるのではないかと！ここで原点に戻ってみるのも良いのではないかと、等々。しかしながら収穫祭では、タイムスケジュール上無理、それよりも五月末に百瀬さんが英国のレア・ブリードの会合に出席されるので、その報告を兼ねて別の機会に単独で行うという事になりました。

このように今回のビデオは、四年前のマンクス導入時の選抜の様子と、今年五月の英国レア・ブリードのワークショップの会場となった、半野生状態のマンクスの住むカーフ島と、マン島のマンクスの様子をカメラに収めたものでした。

ビデオを見てまず第一に感心したのは、英国のマンクスの足腰の踏ん張りの良さと、粗飼料を十分に食い込んだ腹部の充実です。雑草が少なく、密度もある放牧地の草地管理の良さに牧畜の歴史を、逆に雑草しか生えていない無人島のマンクスの状態の良さに粗食に耐える原種の力強さを感じました。

以前マンクスの世話をしていたとき、90cmのフェンスを楽々と飛び越え自分勝手にどこでも歩き回って脱柵常習マンクスが、柵の中の者より発育が良好であったことを思い出しました。育成期にどれだけ粗飼料を十分に食い込むかが草食獣としての羊の成長を決定付けてしまいます。マンクスの場合人間と接することにより受けるストレスを考慮して、特に育成期には、不必要な人間との接触を少なくし、放牧主体の飼い方が望ましいのではないのでしょうか。その他、バランスの良い角をもつ固体が少なく、過去交雑したと考えられる品種（ソーエイ、キャッスルミルク・ムーリット、ポートランド）の形質が、ソーエイ・マーク、目の回りのクリーム色の筋、角のカーブなどに現れているのも見い出されました。

今回のビデオの主演は、あくまでマンクスだったのですが、私にとってはマンクスを飼っている人達の暮らしぶりの方により興味をそそられました。自分で古い納戸を移築して自給自足の生活をしている人。トレーナーに羊を積んで渡り歩くジプシー・シェパード。ソーエイの肉を期間限定で特定のレストランにのみ出荷する人。中世の農村を再現したマン島の村。等々、どこか偏屈で、したたかな人達の暮らしぶりでした。私も日本のレア・シェパードとして、無人島のマンクスの如く、しぶとくしたたかに歩み続けることとします。

今年は冷夏ということで、私の住む朝霧高原も6月からずっと梅雨の継続状態です。羊舎の床は乾かず、草地の草は根元から腐り始めています。来年のフリースが今から心配です。日本にやってきたマンクスたちにとって、この湿気も新たな

試練かもしれません。

耐えるマンクス！
すべての日本の羊たちよ！

バランスの悪い角オス(右) メス(左)



スライド・ビデオの会に参加して

島田和子

7月11日東京の日本緬羊協会で、百瀬さんの撮影・解説によるマンクスのスライドとビデオの会がありました。私はレア・シープのことはよく分かりませんが、羊が大好きで5月に研究会に入会したばかりです。今年の3月まで2年間、仕事で羊と関わってきて、今は羊と接する仕事ではなくなりましたが、個人的にはこれからも羊と関わりを持っていきたいと思っていたところなので、当日は岩手からとんで行きました。

イギリスの牧場で日本に導入するマンクスのチェック風景やマン島の半野性のマンクスの映像を見ながら、いろいろお話しを伺ってマンクスに興味が湧いてきました。また、日本のマンクスが着実に増えていることやホワイトマーキングの羊の血統登録問題を知っていろいろ勉強になりました。まだ一度もこの目でマンクスを見たことがないので、今度、本庄さんの所へ見に行くつもりです。

マンクスの毛って本当にいい色ですね。私も紡ぎを覚えたので、いつかマンクスの毛で何か作ってみたいと思います。どなたか来年マンクスの毛を譲ってくださいますか。

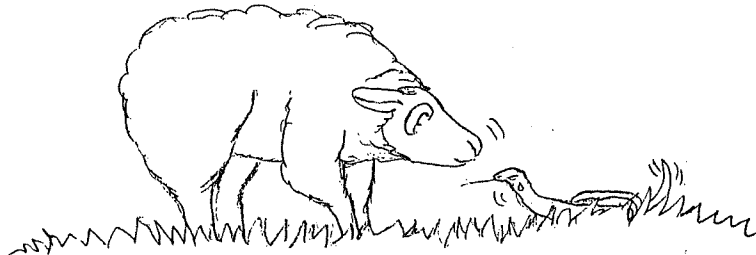
当日、時間はあまり長くありませんでしたが、とても有意義な良い会だったと思います。百瀬さん、皆さん、ありがとうございました。

制作部門からのお知らせ

下山 里香子

臨時号で呼びかけた「マンクスのフリース アイデア持ち寄り会」は6月26日(土)大庭さん、松本さん、三森さんと制作部門のメンバー(佐藤、下山、堀内、百瀬、吉田)が集まり、フリースを前に楽しい話し合いができました。その結果、テーマは特に決めず会員の皆さんが日本のマンクスにどう関わっているか現せればということになりました。羊の毛を使って、出来るかぎり多くの会員が参加して一枚のマンクスのフリースにフェルトしたいと思います。皆さんのご協力をお願いします。募集するものは下記の通りです。

大 き さ	10cm×10cmくらい 又は紐状
色	染色していないものならホワイト・カラードを問わず何でも可。
技 法	自由(織り、編み、組み、フェルトetc.) ステイプル(房)のままでも紡いだ糸状のままでも可。
締 め 切	1993年10月20日(水)
送 り 先	〒214 神奈川県川崎市多摩区生田7-25-3
問 い 合 わ せ	Tel. 044-932-7303 下山里香子



自己紹介

◆楠本雅弘◆

最初に型通りの自己紹介。1941年愛媛県北宇和郡に生まれ、高校卒業まで暮らす。幼時、羊は見なかったが、山羊は身近に居り、小遣い稼ぎにうさぎを飼った経験がある。

大学卒業後、農林漁業金融公庫に勤務し、農林省農業総合研究所や農政調査委員会などで研究や農村調査に従事したこともある。1987年に転職し、以来山形大学で経済学を講義している。主に研究しているのは、農村の歴史や農業政策、最近では農家の経営と暮らしの自立をテーマに実践活動も行い、全国行脚も続けている。

羊飼いで、スピナーでも、ウィーバーでもなく、畜産の研究者でもない者が、なぜ羊と付き合っているのか。話せば長くなるので簡単に言い切ってしまうが、環境保全型農業や山村地域の経済の活性化や新しい地域文化の振興の観点から、羊は最も可能性に富み魅力のある対象だということである。

1989年11月盛岡で開催した「羊シンポ」では実行委員会の事務局を務めた。その企画・運営の中心を担ったアグロフォレストリー研究会が発展的に改組された未来開拓者共働会議の代表委員を務めている。

◆スピンハウス ポンタ（本出ますみ 坂田千明 山中裕子）◆

「スピンハウス ポンタ」と聞いて、変な名前！って思われたことでしょう。「クルクル廻るポンタハウス？」まあ、そんなところです。本出ますみ・坂田千明・山中裕子・プラスすみれ（3歳）の三人半で手紡ぎ用原毛の輸入と販売をしています。

「フリース」は最近でこそ少しは耳慣れてきましたが、まだまだマイナーな業界。うちは呼ばれりゃどこでも出張講習会します。（『ホッチキス パーティー』と銘打って羊毛のサンプルをホッチキスで止めて『羊の手帖』という冊子を作ります。）また年3回、手紡ぎ愛好家のための『スピナッツ』（紡ぎきちがい）という雑誌も出しています。最近イベントや羊毛のコンサルティング業まがいの仕事も増えて、本業の原毛屋は千明ちゃん・裕ちゃんに任せ、やくざな浮草稼業、ホームレスのように各地の羊偏をウロウロしています。スピンハウスポンタの使命は「スピナーと牧場をつなぐコミュニケーションハートのキャッチボールをめざす！」なので、レアシープや国産羊とのコミュニケーションにも興味津々。羊印の三人半をどうぞよろしく願いいたします。

◆三森晶子◆

私は、子供の頃に長野県から北海道札幌に引っ越して7年間すんでいたことから、（暖かいもの＝羊）が大好きになったようです。羊毛を洗って、紡いで、織ったり編んだりしている時は、いつでも暖かな幸せな気持ちになります。

手織りや手編みを始めた頃は、既製の糸を使っていました。しばらくして、昔の人は羊を飼い、草木で染めて紡いで織ったり編んだりして家族に着せていたことを知りました。私も糸を紡げるようになると、今度は羊に夢中！ 手にすることが出来る種々様々な羊毛を紡いでみました。昔から手紡ぎに使われていた羊毛が作りやすくて楽しいと思いました。

私の大好きなレア・シープたちが大切にされていくために、研究会での私のレアな活動が少しでもお役に立てばと思います。



誌
上
ギ
ャ
ラ
リ
ー

森賀順子（まかいの牧場）

マンクス・ロフトンのウールでセーターを作りました。繊維は細くて柔らかい割に弾力があり、その姿や行動とはかけ離れた感じのウールでした。ところが、洗毛→カーディング→紡ぎ…と手を入れる度にフリースで感じた時のイメージが、どんどん変わっていきました。初めは、弾力があるので太めの単糸に紡ぎ、厚地のメンズセーターにしようと思ったのですが、いざ紡いでみると本当に柔らかで、最初のイメージがなくなってしまったのです。そこで、もう少し細めの双糸にしてみました。今度は、見かけは細かい繊維が出てかたい感じの糸なのです。それを試し編みしてみると、軽く張りのある優しい感じの編地になりました。結局、小さなケーブルと表裏だけのダイヤ模様を入れた、比較的薄地の柔らかい感じに出来上がりました。

マンクス フリース販売のお知らせ

今年も富士サファリーパークのご好意によりマンクスのフリースを研究会に寄付していただきました。不思議な原種のウールを手にし、その魅力にとりつかれる人達が増えることを願いつつ今年も皆様にお分けいたします。

1995年のカラード・シープ国際会議の制作出品も考え合わせどうぞご応募下さい。一人何点でも応募可能です。締切り 9月20日。事務局までお寄せ下さい。応募多数の場合はこちらで抽選させていただきます。尚、9月末、フリースの発送をもって発表にかえさせていただきます。価格はすべて 4000円/Kgです。

羊の固体No	フリース量	毛長	カラー	特徴
3925 (♀3才)	0.3 Kg	肩6cm	ムーリット	自然換毛のためフリース量が少ない
3875 (♀3才)	0.7 Kg	肩7cm	ムーリット	同上
5847 (♂1才)	1.0 Kg	肩11cm	ムーリット	バージンウール 3875の子

家畜羊の祖先を探る (中) 野生羊と家畜羊との雑種の妊性

正田 陽一

家畜の原種を探る上で、両者の間に雑種ができるかどうか、またその雑種が正常な繁殖力を持つかどうかということは大切な問題となる。家畜とその原種という関係にある者同士なら、動物学的に同一種で両者の間には簡単に雑種ができて、その雑種は正常な繁殖力を持つはずである。

家畜羊の染色体数は $2n=54$ 。半羊と呼ばれるバーバリーシープ ($2n=58$)、バーラル、タール ($2n=48$)のいずれも家畜羊との間に雑種を作ることはできない。家畜羊とバーバリーシープの間では自然交配が不可能だったので、人工授精を試みた研究者がいた。6頭に実施して2頭が受胎したが、妊娠の早期に流産して雑種は生まれなかった。これは半羊と家畜羊の関係がかなり離れていることを示している。また、ケルレル(C. Kellel)は壁面に残されたエジプトの古代羊の像に見事な胸ひげのあることから、これをバーバリーシープを家畜化したものだと推論し、ヨーロッパの古い家畜羊もその子孫であるという説を唱えた。しかし、雑種を作ることはできないので、この説は現在では否定されている。バーバリーシープの飼養が古代エジプトで行われていたかもしれないが、現在の家畜羊の祖先ではあり得ないし、胸ひげが立派であるという特長はウリアルも持っているので、このことからだけからバーバリーシープの家畜化をいうのは危険である。

一方、ヒツジ属に属する野生羊との交雑実験では、まずムフロン ($2n=54$) と家畜羊の間ではどちらをオスにしても交配が可能で、生まれた雑種はオスもメスも繁殖力は正常である。雑種の毛の性質は両親の中間性を示し、やや粗毛が多くなる。体重は母親の種に近くなる傾向がある。敏しょうで素早い気質はムフロンに似ているといえる。アジアムフロン ($2n=56$) やウリアル ($2n=58$) と家畜羊の間も同様に正逆交配が可能で、雑種は正常な繁殖力を持っている。ウリアルの精液を家畜羊のカラクル種のメスに人工授精した実験では妊娠期間約150日で子が生まれ、その雑種第一代は長脚で耳が立っていて角の形、毛の質などがウリアルに似ていたという。この雑種第一代のオスの精液を192頭のカラクルに授精したところ受胎率は62.1%で、その雑種の死亡率は高くオスの繁殖力には多少の減退があったと考えられる。アルガリ ($2n=56$ or 58 亜種によってちがう) と家畜羊との雑種も作られており、雑種は両性とも繁殖力は正常である。アルガリの一亜種アルカーは品種改良に利用されており、ロシアではメリノ種のメスにアルカーの精液を人工授精し、この一代雑種を家畜羊にもどし交雑することによって産業価値のある品種カザック・アルカー・メリノ種(Kazakh Arkhar Merino)を作出している。ビッグホーンと家畜羊の間でも雑種はできるが、両者の間の雑種は数カ月で死亡するものが多く、成熟しても繁殖力は弱くなっている。雑種の外貌は顔面に緬毛が無く裸出し、体の毛は粗毛と緬毛が混ざっていて、四肢は長く尾はビッグホーンに似て短い。

このような野生羊と家畜羊の交雑実験の結果から見ると、ビッグホーンの仲間は家畜羊と関係が離れていて、ムフロンの仲間とウリアル、アルガリは家畜羊と近縁であることが推察される。現在の改良された家畜羊は、ムフロン、アジアムフロン、ウリアル、アルガリのうちのいずれか(1種又は数種)から馴化されたと考えられる。

一番古い家畜羊と認められる遺骨は、イラン北部のカスピ海の沿岸のベルト洞窟(Belt Cave)で見つかっており、紀元前6000~5000年ころのものと考えられている。このほかイラク北部のジャルモの遺跡(Jarmo, B. C. 5000)やトルキスタン南部のアナウの遺跡(Anau, B. C. 3500)からも家畜羊の遺骨が出ている。これらの遺骨は掘り出された数の多寡や、角が野生のものより小型になっていること、鼻梁の線が曲がっていることなどから家畜羊と判断される。紀元前2000年のメソポタミアには、すでに5つの異なった体型の品種が作られていた。これらの古代の家畜羊の先祖はウリアルを馴化したものであろうと多くの研究者は考えている。その根拠となるのは次の5点である。

- ①馴化が行われたと考えられる地方は、ウリアルの野生している地域である。
- ②家畜化は遊牧狩猟民によって行われたと考えられており、山岳地を棲息地とする種より草原棲のものを馴化したと考える方が自然で、北部イランに分布するウリアルの亜種アルカルはその条件に合っている。
- ③古い家畜羊は雌雄とも有角で、角の形や色もウリアルに似ている。
- ④家畜羊は尾が長く、尾椎が13個以上(長尾種では35個に達するものもある)で、長尾性の野生羊はウリアルだけである。
- ⑤頸に長い毛のふさのある点でウリアルに似ている。

このウリアル起源の家畜羊はその後ヨーロッパやアフリカへと広がって行った。スイスの湖棲民俗の遺跡から出る泥炭層山羊と呼ばれる新石器時代の家畜羊があり、メスもかなり大きな角を持つことや、長尾であることなどからウリアル系のものと考えられている。やはり新石器時代にメソポタミアからバルカン半島を経てヨーロッパへ入って来た、コルク抜きのような形のらせん角を持ったザッケル種(Zackel)もウリアル系のものである。

これらの古代羊のほかに、ヨーロッパの北部から北西部にかけて(北ロシアからスカンジナビア半島、デンマーク、北西ドイツ、西フランス、イベリア半島)黒味がかった角を持つ短尾の在来種も飼われていた。この羊は18世紀ころまではかなりたくさん飼われており、現在でもその典型的なものは英国のセントキルダ島(St. Kilda)に見られる。それが、ソーイ種(Soay)である。ソーイ種は短い直立した耳を持ち、オスの角はうずまき型に巻いているが、メスは無角かごく小さい角である。毛は粗くボサボサしていて頭部や頸の一部には粗毛(hair)が生えている。毛色はムフロンに良く似ていて特に前肢の毛色パターンはそっくりで、背にサドルマークが現れることもある。尾は短く尾椎は12~13個。このような特徴は、このヒツジがムフロンを祖先としたものであることを示している。おそらくウリアルの馴化より遅れてヨーロッパでムフロンの馴化が行われ、その後この両者が混血して現在の多くのヨーロッパ系の品種が作られたのだろう。

オランダのテキセル種(Texel)は、ムフロン系と思われる在来種を英国のリンカーン種(Lincoln)で改良したもので、スペインのメリノー種(Merino)もムフロンの血を引いたラーチャ種(Lacha)に古代メソポタミアのウリアル系の羊がアフリカを経てスペインに入り交配されて成立した品種である。メリノー種のオスは有角、メスは無角という性質はムフロンに由来するともいわれる。

エジプトにも古くからヒツジが飼われていたが、よその土地で家畜化されたものが導入

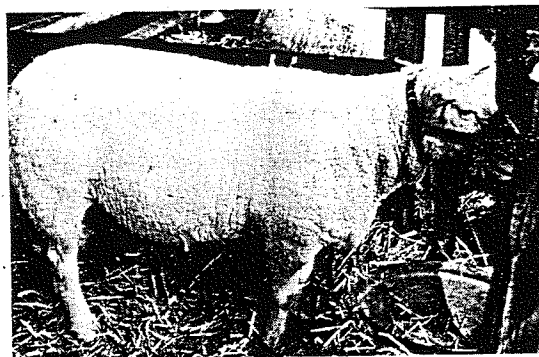
されたと考えられている。アフリカの家畜羊には大別して4型があり、一つはムフロン起源のもの、あとの3型はウリアル系のもの。カメルーンの小型のヒツジは、角の色も形もムフロン型で背のサドルマークもある。ウリアル系の3型の中、現在も北部アフリカによく見られるのは脂尾羊タイプの品種である。長い尾に脂肪を蓄積する脂尾羊は紀元前2500年ころにメソポタミアで作られている。乾季に食糧の欠乏する乾燥地帯では、雨季の草の豊かな時期に栄養をとって体内に脂肪として蓄積する必要があり、この性質を人間が利用するために改良が進められたのが脂尾羊である。尾が短く尻の部分に脂肪を蓄えたものを脂臀羊と呼んでいる。南アフリカのブラック・ヘッド・ペルシアン(Blackhead Persian)もその一つである。脂臀羊はアジアにもたくさん飼育されている。アジアの脂臀羊の分布はアルガリの分布地域と一致しており、角の形もアルガリ型なので、祖先はアルガリではないかと推測されている。(ウリアル系の脂尾羊から作出されたという説もある)

アルガリが馴化されたものだとすれば、おそらくその年代はウリアル系の馴化より新しく中央アジアのモンゴルの人たちが西アジアのウリアル系の古い家畜羊を知り、それを真似て土着のアルガリを馴化したものと考えられる。(つづく)

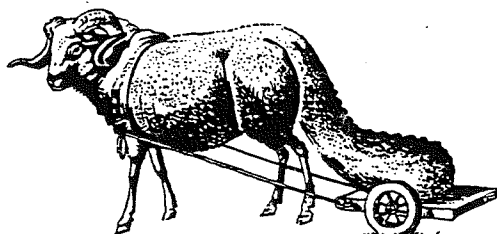
(どうぶつと動物園 1979年2月号より転載)



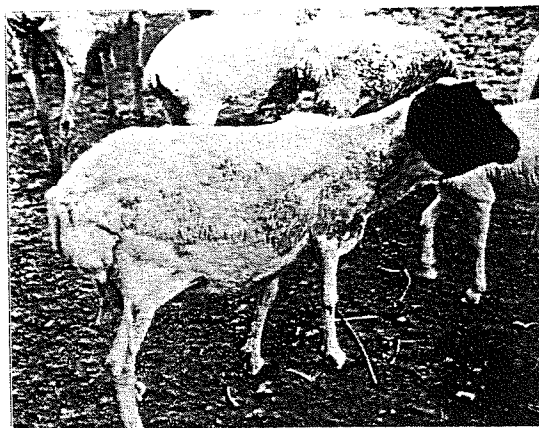
ザッカル種
Zackelschaf



テキセル種
Texel
内藤原図



脂尾羊
Long-tailed eastern sheep.



脂臀羊ブラック・ヘッド・ペルシアン種
Blackhead Persian.
加納原図

羊のティータイム (III)

羊飼いの小屋 the shepherd's hat

百瀬 正香

イングランドのイーストアングリア。そこで、とある有機農業の農家を尋ねた時珍しい物を目にしました。それは「羊飼いの小屋」と、いわれているシェパード・ハット。それ自身そう珍しい物ではなく、地方の博物館ではかなり頻繁に目にしますがこの農家では、いまだにそれを使っているというのです。

「羊飼いの小屋」と一口にいても、それは時代により、国によってかなり形態が異なります。記録として残されているものは主に中世からですが古いものでは、ギリシャ文学オデッセイの中にも出てきます。なめしていない牛の皮にシーブスキンを敷いた、小屋といえないほど粗末なものだったらしく、羊飼いはほとんど利用せず、羊の群れのそばでウールのマントにくるまって直に寝たようです。

中世から近代にかけて、夏になると山の牧草地に羊を連れていく「移動放牧」を行うところでは、その場でチーズやミルクを作らなくてはならないため、小さいとはいえ住居のような小屋をしていました。特にユーゴスラビア中西部では、2つも部屋のある小屋で、1つは土の上に直接ファイヤーの付いたりビングルーム、もう1つはチーズやミルクを作る部屋でした。チェッコやスイスでも夏の小屋でチーズやミルクを作っていたという記録があります。

私が目にした、車の付いた荷馬車のように小さな小屋は、イギリスばかりでなくフランスやドイツでも見られますが、これはチーズやミルク作りのためではなく、羊の出産時に使われました。羊の群れが村から遠く離れた草原にある場合、出産のトラブルに備えて羊飼いはこの小屋で日夜を過ごしたのです。出入り口にある踏み台は取り外すことができ、馬に引かせて楽に移動することもできました。小屋の窓は普通小さく、見晴らしを利かせるため3方に取り付けられたものもあります。作り付けベットもあり、その下は手当ての必要な子羊のため、サークルになっているものもありました。夜、暖を取るためのストーブや哺乳瓶、薬も用意されています。小屋のそばには母になった羊と、子羊を寒さから守るため木の枝などで網代組みされた垣根があり、その

中には藁葺き屋根の付いた出産コーナーも

あります。羊飼いは夕食時には家に戻

り家族と一緒に食事をしますが

その後、24時間分の食事

を持って小屋に戻り、寒

さの厳しい長い夜を、

気を張りなが

ら過ごした

とい

ます。



私からの提案

百瀬 正香

今、研究会では研究会費として80万円程の蓄えがあります。これは皆さんから集めている年会費とは別に（年会費はレターズの諸経費や発送費に使われています。）会員の人がこの会のためにアイデアや力を出し合って生み出してきたお金です。それは商品部門で制作して来た、Tシャツ、レターセット、イスのソックス、羊の絵はがき、などの販売、講習会の収益、刃研ぎ、マンクス・ロフタン・フリースの販売、英国からの商品輸入販売（といえるほどの物ではないのですが）などからの収入です。

「レア・シープ研究会」の会員皆が志している、フロンティア精神と、ボランティア精神で、ここまでこられたことは嬉しい限りです。そこで今度は、このお金をどのように活用したら研究会に最も相応しいかを皆で考えていきたいと思えます。今のところ、ウール部門の「5年間のフリース調査」に経費がいくらかかかる事は分かっています。他に来年のカラード・シープ国際会議に参加するための準備諸経費が掛かってくることも考えられます。それはそれとして……………

ここに一つ提案があります。

日本にマンクス・ロフタンを導入した時、レア・ブリード・サバイバル・トラストの行政長官であり、この件に対して常にサポートして下さり、心に掛けて下さっているアレスター・ダイモン氏を日本にお呼びし、全会員の牧場を見ていただきながら羊飼育管理、牧羊管理全般にわたってのアドバイスを頂けたらということです。

お金のことにしても、その使い方にしても急な提案で、戸惑われるかもしれませんが、急いで事を起そうという訳ではないのでこの案を1つの叩き台とし、皆でいろいろ考えていきたいと思えます。バラエティー豊かなアイデアをお寄せ下さい。それらを検討し、よりよい活用法を考えていきたいと思えます。

皆のアイデアの助けとなるように、ダイモン氏に関してもう少し説明させていただきます。彼は、牧場農家の出身で、何年もの間実際に英国で家畜の飼育をしてきましたが、その後ニュージーランドに渡り羊と牛の農場管理研究所で4年間研究し、英国に戻ってから、一貴族の牧場管理のアシスタントとなり、そこで始めてレア・シープと出会いました。その後ナショナル・アグリカルチャー・センターの農場支配人となり、そこで主に稀少家畜の管理を任せられ、そこでの最後の4年間は農業長官補として牛、羊の肉やスキンまた乳製品、豚、家禽類の管理全般に亙って技術指導をしてきました。1985年トラストの行政長官を引き受けられ、1991年にご自分で家畜の牧場管理のコンサルタントを開業なさるまで続けられました。

80万円では資金不足だと充分分かっていますが、二年後の1995年（1994年はカラード・シープ国際会議）にと考えたら、もう少し資金も殖えているだろうと思えます。というのも、この間英国で目にした「Hill. Shepherds」という写真集を50冊、日本ヴォーグ社で買って下さることになりましたし（この写真集は会員価格4000円でお分けできます。事務局まで申し出て下さい）、マン島のクラフト・センターからマンクス・ロフタンのセーターやツイードの日本での販路を頼まれていましたが、数が少ないとはいえ取り引き先が見付かりました。こんなことを積み重ねていけば通常の会の製品以外にも、いくらか資金が増えていくだろうと考えるわけです。

資金活用法のアイデア、あるいはこの案に対しての意見をどしどしお寄せ下さい。

研究会オリジナル商品の紹介

◆Tシャツ

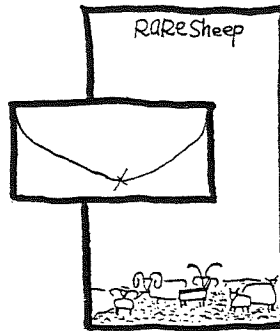
純白の地に黒でレターズ表紙でおなじみのマンクスロフタンのイラストがプリントされています。サイズはLのみ。2300円



イラスト：佐藤しおり

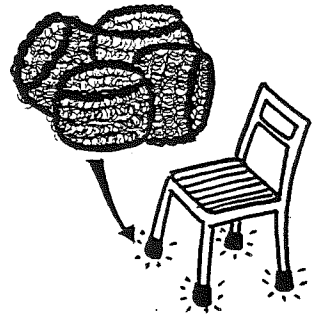
◆レターセット

レアシープ5頭（ノースホルドセイ、ノークホーン、マクスロフタン、ソエイ、ウェズレデル）のイラストが入った再生紙の便箋10枚と無地の封筒5枚、羊の説明書付。700円



◆いすのくつした

ハードウィックの毛できつく編んであるので、とても丈夫です。いすをスムーズに動かせ、床板も傷つきません。色は、グレーと茶、サイズは、大・中・小。1200円



インフォメーション

●勉強会

第一部…「色素遺伝」正田陽一先生 第二部…「マンクスの今後の交配」話し合い
時…11月21日（日） 場所…国立オリンピック記念青少年総合センター（予定）

●会員紹介

新会員…緒方梅男 〒228 神奈川県座間市相模が丘5-27-13 Tel.0427-42-8853
退会会員…日向野千穂 〒359 埼玉県所沢市北中3-19-65 Tel.0429-23-9293

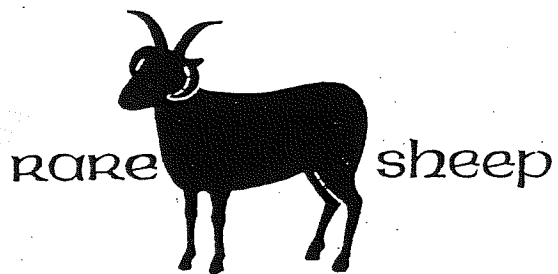
●羊を譲ります

フィンクロス、チョゴリのオスとメス、3～10才。詳細は豊岡（Tel.0544-52-0324）

編集後記

毎年恒例になった「神奈川フリースデー」、今年は5月23日服部牧場で行われました。大雨予報にもかかわらず、当日は羊パワーに雲も吹き飛ばされて大晴天。4回目にして、フリースのグレードは驚くほどアップし、スピナーが泣いて喜ぶファインなフリースがコンテストやお店に並びました。会員のFlying Sheep豊岡さんのフリースも入賞しました。

レターズは研究会の活動を報告する一方、九州から北海道に住む会員の方々の誌上交流の場でもあります。お便りお待ちしております。次号の締切りは11月20日です。尚、宛て名に赤線の引いてある方は今年度の会費が未納です。（佐藤しおり）



1993年8月発行 第5号 (年3回発行)

編集・発行 ●レア・シープ研究会 百瀬正香

〒247 神奈川県鎌倉市大船6-10-58

Tel. Fax. 0467-47-5516